

112. 音楽を通じた障がい者理解の当事者意識を育むプログラム構築－ホワイトハンドコーラスの活動から考える－

京都女子大学発達教育学部 教授 ガハプカ 奈美

概要

本研究は、障がいの有無を超えて人々が共に音楽を創造する実践である「ホワイトハンドコーラス NIPPON」の活動を対象とし、音楽を媒介とした参与的・対話的实践が、非障がい者を含む参加者の「当事者意識」をいかに育むかを明らかにすることを目的とした。

参与的観察、自由記述式アンケート調査、資料分析を通じて、従来の「支援する側／される側」という二項対立を超え、参加者が相互に影響を与え合う関係性が生成される過程を質的に分析した。その結果、音楽的協働体験は、差異を欠如ではなく創造的資源として再解釈する契機となり、教育・福祉・芸術を横断する共生的実践の基盤となりうることが示唆された。さらに、本研究は、音楽的共創の過程を通して生成される当事者意識の形成プロセスを三段階モデルとして整理した。

背景および目的

日本の教育・社会構造においては、障がいの有無による早期の分離が制度的に組み込まれており、非障がい者が障がい者と日常的に関わる機会は限定的である。その結果、障がい理解は制度的・知識的理解にとどまり、「自分自身もまた不便さや脆弱性を内包する存在である」という当事者的認識にまで至りにくいという課題が指摘されてきた。

本研究における「当事者意識」とは、障がい当事者の立場を代弁することではなく、自己の存在の不完全性や依存性を自覚し、他者との関係性のなかで生きる存在であることを引き受ける姿勢を指す。この視点は、障がいを個人の属性ではなく関係性のなかで生起する現象として捉える社会モデルの視座、および近年のケア倫理の議論とも接続する。

本研究では、こうした分断構造に対し、音楽という非言語的かつ身体的な表現行為を媒介として、障がい者・非障がい者が共に創造する場に着目した。特にホワイトハンドコーラス NIPPON の活動を事例とし、非障がい者の当事者意識がどのように生成・変容するのか、その過程において音楽的協働が果たす役割は何かを明らかにすることを目的とした。

方法

1. 研究方法

本研究は質的研究として実施した。主な方法は以下の通りである。

(1) 参与的観察

公開練習、演奏会、ワークショップ等に研究者が継続的に参加し、活動中の相互作用、対話、身体動作、呼吸やリズムの共有の様相を詳細に記録した。観察は単なる記録にとどまらず、身体的同調や空間の雰囲気といった非言語的側面も含めて記述した。

(2) 自由記述式アンケート調査

参加者および保護者を対象に、活動との出会い、参加後の変化、社会や教育に対する気づき等について自由記述形式で回答を求めた。回答はストーリーテリングとして収集し、語りの内容を質的に分析した。

(3) 資料分析

活動記録、配布資料、演奏会関連資料等を補助的データとして用い、観察結果との照合を行った。

結果および考察

1. 当事者意識の変容

アンケートおよび観察記録から、多くの参加者が「助ける／助けられる」という固定的役割意識から離れ、「違いがあるからこそ共にいられる」という関係性へと認識を変化させていることが確認された。

ある非障がい参加者は、視覚障がいのあるメンバーが身体の揺れによってリズムを共有している様子を経験し、「見えないことは不利なのではなく、別の感じ方を持っているということだと初めて実感した」と語った。指導者はその揺れを修正するのではなく、全体のテンポ形成の一部として取り入れた。その結果、リズムは視覚的合図ではなく、身体的同調によって成立した。

この経験は、参加者にとって「合わせる」ことの意味を再定義する契機となり、他者を変えるのではなく、自身の感じ方を調整する態度の形成へとつながっていた。

2. 音楽的協働の意義

ホワイトハンドコーラスでは、正解や優劣が設定されず、声・手話・身体動作が等価に扱われる。そのため、「できなさ」や「ずれ」は修正対象ではなく、表現の一部として共有される。

この構造は、評価中心の教育環境とは異なる安心感を生み、参加者の主体的関与を促進する。音楽的協働は、単なる共同作業ではなく、呼吸やリズムの共有を通じた身体的同調の経験であり、その同調体験が関係性の再構築を可能にしていると考えられる。

3. 当事者意識生成プロセスのモデル化（試案）

分析を通じて、音楽的協働における当事者意識の生成は、以下の三段階で進行すると整理できる。

○違和の顕在化段階

既存の「あたりまえ」が揺さぶられる体験

○身体的共有段階

呼吸・リズム・身体動作の同調による非言語的共感形成

○再解釈段階

差異を欠如ではなく創造的資源として再意味化する認識転換

このプロセスは、理解を「知識」から「関係性の経験」へと転換する動態的モデルとして位置づけられる。

4. 教育・福祉への示唆

本研究の結果は、特別支援教育と通常教育を分断的に捉えるのではなく、協働的・創造的実践として接続しうる可能性を示している。音楽を媒介とした対話的实践は、インクルーシブ教育の理念を具体的な日常実践として具現化する有効な手法である。

また、評価を前提としない表現空間の構築は、子どもだけでなく大人にとっても自己の脆弱性を受容する契機となり、社会全体の共生意識形成にも寄与する可能性がある。

研究の限界と今後の課題

本研究は単一事例を対象とした質的研究であり、参加者数および地域的条件に限定性がある。また、長期的な意識変容の持続性については追跡的検証が必要である。

今後は、呼吸同期や身体同調の計測を含む実証的研究との接続を図り、身体的共創と意識変容の関連を多角的に検証する必要がある。さらに、他地域や他芸術領域への展開を通じて、共創型インクルーシブ実践の理論化を進めたい。

結論

本研究は、音楽を媒介とした参与的实践が、障がい理解を「知ること」から「共に在ること」へと転換する可能性を明らかにした。音楽的協働は、差異を創造的資源として再解釈する関係性を育み、教育・福祉・芸術を横断する共生社会形成の基盤となりうる。

当事者意識とは固定的な立場ではなく、関係性のなかで生成され続ける動的なプロセスである。本研究は、その生成過程を音楽実践の現場から理論的に提示する試みである。

(完)

発表論文

- 1) 『DUMISTE による体験ワークショップの実践と教育的効果—呼吸・身体・音楽の統合によるインクルーシブ教育の可能性—』 2026 年 2 月 発表予定 京都女子大学 発達教育学部紀要 第 22 号
ガハプカ 奈美, 柳澤 藍
- 2) 三菱財団助成事業報告書の発刊
社会福祉事業・研究助成 「音楽を通じた障がい者理解の当事者意識を育むプログラム構築-ホワイトハンドコーラスの活動から考える-」